



Campus[®]

KOKUYO NOTEBOOK

Kokuyo Co., Ltd. manufactured this campus note book, using carefully selected writing paper, which is suitable for writing in pen as well as in pencil.



敬学会の研究

斎藤茂吉の研究

敬学会賞第三十四回入選作品



山一小学4年2組 大久保治彦

ノ-5B 50枚



目 次

1. 研究の動機 ----- 1
2. 研究の方法 ----- 1
3. 研究の実際 ----- 2
 - (1) 茂吉のおいたち ----- 2
 - (2) 茂吉の生家、寺、学校などのかんきょう ----- 3
 - (3) 茂吉の歌ひをだづねて ----- 10
 - (ア) 蔵王の歌 ----- 23
4. 研究でわかったこと(まとめ) ----- 35
5. 研究の反省 ----- 36
6. 参考資料と協力してくれた人 ----- 37

1.

研究の動機

ぼくは、斎藤茂吉が、1人だけ文化くん章をもらったので茂吉が、どういうところで育ってどういう歌をうたったのか知りたいと思いました。それに、おじいちゃんが、ぼくの家をたくさん茂吉記念館にきふしたといっていたので、茂吉記念館には、どんな資料があるのか、小学校の時、どんな子どもだったのか知りたいのですことにしました。

2.

研究の方法

(1) 茂吉のおいたちを調べる。----図書

(2) 茂吉のかんきょうを調べる----たずねる

生家
寺

学校

大石田

(3) (3) 研究してわかったことを文に書く。

3 研究の実際

(1) 斎藤茂吉の生い立ち

明治十五年(千八百八十二年)に山形県南村山郡金瓶瓦村に生まれた。

金瓶瓦は、戸数八十、柱時計は斎藤十右衛門に一つ、学校に入角時計がースたたみのある家は約半分。

本名はツゲヨシです、しかしみんながモキチという方が使いやすいのでモキチとっていました。

ですから、ツゲヨシも後年自分自身をモキチとしています。

茂吉の家は金瓶瓦で中位より少しいい生活をしていました。

家むくは父熊次郎(三十二歳)母いく(二十八歳)長兄
広吉(九歳)次兄富太郎(七歳)祖父伝吉(四十七歳)祖母
ひで(同)曾祖母ちゃん(六十五歳)。

茂吉の父は小男母は大女だった。そして父は歌もおどりも
上手だったが、母は何一つ出来ず口もろくろく利けないところ
があった。

茂吉の祖父は和歌をやり茂吉もそのえいきょうを受けてい
た。

小さいころ茂吉は、神けいしつでひよろひよろしていた。

また、とくに夜中におしっこがでたようです。

またとても古物がすきなくせががあった。

茂吉は小さいころは、とてもガキ大しようだった。

しかしりこうで、小学校時代は一年二番二年四番三、四年は
十番五年十六番だった。

そして十五歳になるとしんせきの斎藤系己をだずねて
上京する。後に、かいせい中学をえ、てい大(東大)に
進学する。

(2) 茂吉記念館



斎藤茂吉記念館は、上山市の郊外みゆき公園
にあります。ここは、蔵王連峰を真向いに、仰ぎ
松林と桜にかこまれたしずかな土地で、茂
吉の生家に近いので生前たびたび、ここを
おとずれています。

43年9月開館、茂吉のいこう、いぼく、しよが、や
同時代の文人のいぼくなどがあります。

さらにみゆき公園内には、明治天のうあんざいしよ

明治天のうあんざいしよ



もありました。

ぼくがとくにおもしろ
かったのは、出わがだ
けの手形です。

出わがだけは、茂吉
のしんせきの斎藤
紀一のようしです。

出わけがだけの手形

この手形はぼくの
手のばいぐらいだ
いた。

高さは、この石ひと
同じ203cmです。

童馬山房書屋

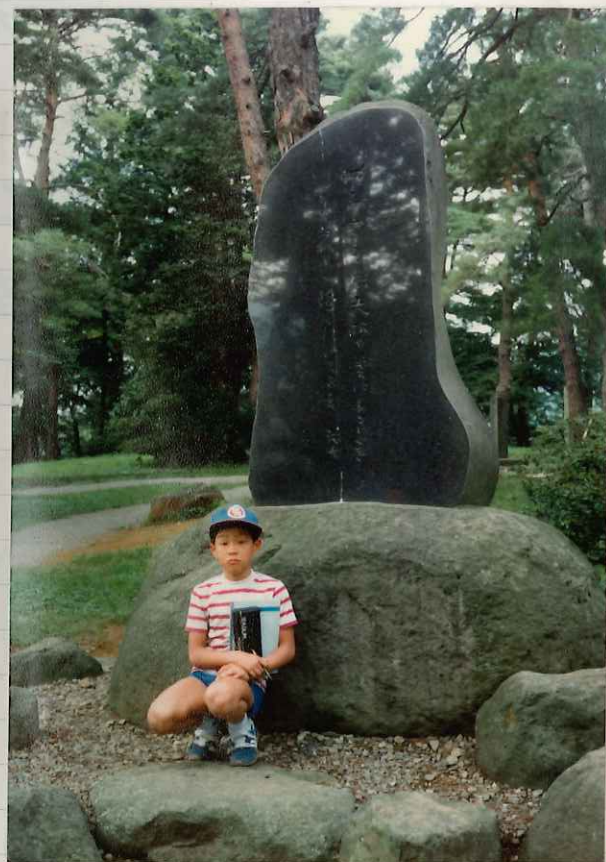
書屋は大正十一年、茂吉のよう父斎藤系己が
はこ根土地会社からこし、手を加えたもの
です。

昭和十七年、茂吉は北側の空地に木ぞうかわ
らぶきひら屋で四畳半(食事室けん客室)

六畳(書さいけんじん室)一畳半(物置)ベン所
などで、八つぼだけでとても小さく、せまい。

よくあんなところで、すばらしい歌がくれたな
と思った。

茂吉記念館歌ひ



茂吉記念館歌ひ

ゆう[✓]されば大根の葉にふるしぐれいたくさびし
くふりにけるかも

蔵王山その全けきを大君は 明治十四年あおぎ
たまいき

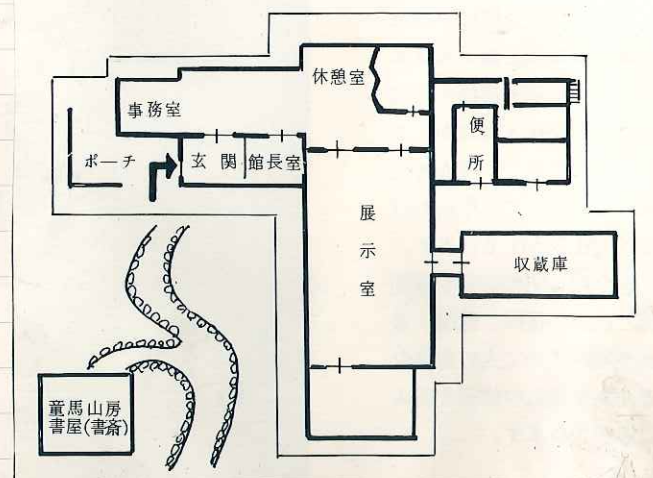
木公にかこまれた中に、茂吉の歌ひがある。

とてもすずしく気持ち^ちいいところだ。

緑のしばふもきれいにかりこんである。

記念館の中

茂吉記念館平面図



<い品>

めがね、デスマスク、衣類、食器^い、ひっき具
など。

衣類のせ広などとても立派です。しかし生前
茂吉が使い用したひっき具は、ちびた小ふで、半分
に割れたえんぴつなどとてもおそろしかった。

茂吉は古い物を大事につかうなと思った。

<父への歌>

大正十二年茂吉が、ドイツにりよう学中死去のほ
うを受けた時の歌

わが父が おいてゆきしことず木沢の国ひたに
なげかう

<母への歌>

死に近き母が目によりおだまきの花さけたりていい
にけるかも

この二つの歌で茂吉が親思いだと思った。

茂吉ほだい寺の門と哥欠ひ



〈ほだい寺の宝泉寺〉

せみがうるさいほどなっている。

おつちいた感じの寺でおどろが小さい。おまいりに来る人もいない。

おどろのちょうこくは、とても古くおちついている。

茂吉のはかは、とても立派なあららぎの木の日かげに、かこまれている。

となりののはかは、茂吉が小さいころかわいかられたおしょうさんのはかです。

また、分こつなのでそんなに丈夫なに大きくありません。

寺には、いちょうの大木もあります。

〈小学校〉

とても小さな古びた二階建てで、木の色も黒^くづんでいる。

とてもおそまつでむかしの方は、こんな学校

乗船寺
茂吉のはか



で危な^い強^いするのいやだったろうと思った。

(3) 歌^{うた}ひをたずねて

大石田

〈大石田と茂吉のかんけい〉

昭和20年4月大石田にせんそうぞかいした。
最上川をよんだ名歌^{うた}を生んだ。大石田には、二
年ほどいた。

〈大石田の町なみ〉

とてもしずか^いでおちついた町だ。ビルもほとんど
なく古い家が多い、町はずれは、田んぼ^いがほとん
どだ。

〈乗船寺〉

茂吉のはか

茂吉のはかは、東京都の青山ぼ^ち、上山市宝泉
寺それにここ大石田の乗船寺にある。

こののはかは、上山の宝泉寺と同じ分^{ぶん}こつですが
ずっと大きくて立^たはです。

正岡子きのくひ



茂吉の歌欠ひ



なぜなら、弟子の板垣かねおさんほか、多くの弟子
がきょう力したそうだからです。

石のかべにかこまれてしばふも立ぱ。

すばらしいはかだと思った。

〈歌欠ひ〉

この寺の庭には、

最上川さか白なみのたつまでにふぶくゆうべ
となりけるかも。

という歌欠ひがある。そしてとなりには、正岡子きの
ずんずんと夏をながせや最上川

というくひがある。

かえでと栗の木に囲まれてうらには、小さなたき
がある。

しずかでのどかなところだ。

歌欠ひも立ぱではいいいもいいい。

ここに立てた弟子の気持もわかるような気がし
た。

虹ヶ岡公園歌ひ



＜虹ヶ岡公園＞

ここまでくるのに時間がかかった。

いろいろな人にきいてやっときた。

と中で農家に道をきいている時、おすのツヤ王がと
びかかってぼくの足につめをつきさしました。

歌ひは、高台にあるのでじやり道を登りました。

すぐ南には広々とした最上川が見えけしき
のいいところだ。

歌ひは

最上川の上空にしてのこれるは、未だうつく

しき虹の断片

四角の立ばな石だ。

すずしくひぐらしがなっている。

歌ひも立ばではいいいもいい、すばらしい歌
ひだ。

岡のまわりにはつじが生えてある。

てんぼう台から見える最上川は、太陽がはんし

ダリア園歌ひ



しゃして とてもきれいだ。

〈蔵主〉

蔵王と茂吉のかんけい

茂吉は蔵王がすきでたびたびおとずれ、数々の歌を作った。

〈上ノ台ゲレンデダリア園歌ひ〉

万国の人来り見よ雲はるる蔵王の山のその
全けきを

とどろける火は、おさまりてみちのくの蔵王の
山は、さやにそびえる

歌の由来

昭和二十五年六月毎日新聞観光百選に
第一位になったので、小さいころから親んでい
たために、そのよこびで歌を作った。

ブナの大木がそびえる中、横にゴンドラが走
りあらあらしいりゅう山が見える。

ひには、ずい分いたずら書がある。

蔵王ガーデン歌ひ



茂吉が蔵王から町を見下しているようだ。

＜蔵王ガーデン歌ひ＞

ひんがしに直にに向う岡に上り蔵王の山を目
守りて下る。

昭和二十年よんだ歌、はじめをかいた金かめの
実家から来てよんだ

今は前にホテルがある。

ぶなの林とくまざさにかままれたすぐ下に杉ノ

谷地沼がある

よほど注意しないと見つからない



〈観見松平歌ひ〉

みちのくの蔵王山なみえる雲のひねもすかし春た
つらしも

すか上にくまのだけがそびえている。

ごよう松が所せましとならんている。

くまざさ^さがおいしげり、コオロギとウグイスがな
いていた。

歌ひがとてもユニークだ。

だんだんになっている石の上に長方形の石、そ
の石のところに歌を書いた大理石がはめこん
である。

草花にかこまれてとてもさわやか。

とてもいい歌ひだ。

月岡公園歌ひ



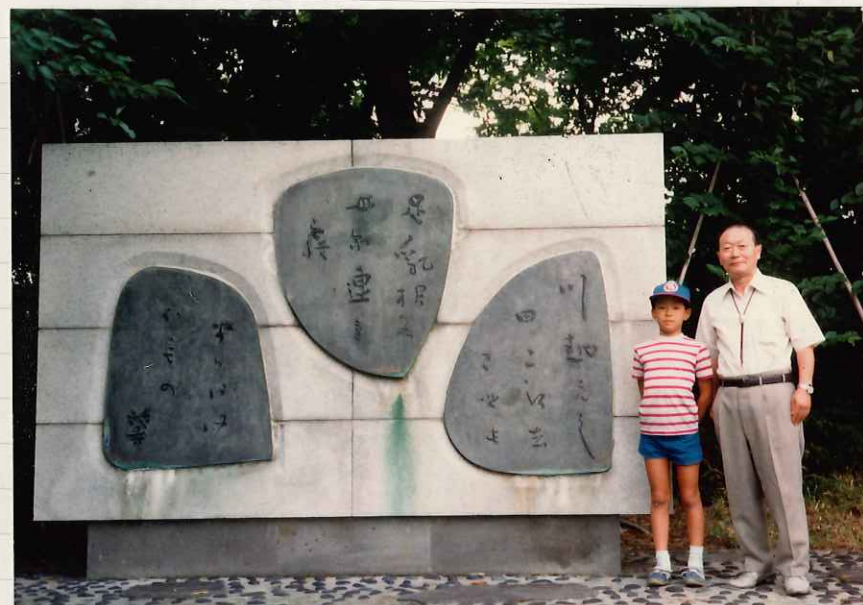
いんしょうにのこった歌ひ

〈上山市月岡公園歌ひ〉

この歌ひは、糸田長い石に歌を書いたどうばんをう

めこんだ歌ひ。

上山のながめがすばらしかった。

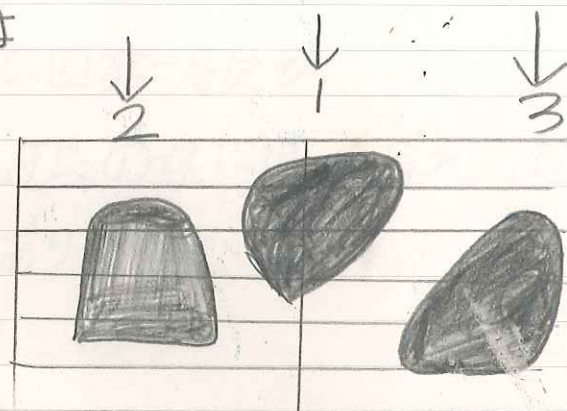


し

もう一つの歌欠もおもしろい。

コンクリートに三つの石がうめこんである。

これは



と言売む。

行った歌ひ。

8/6

月岡公園第一歌ひ

足乳根の母に連れられ川越えし田こえし
こともありにけむかも。

同第二歌ひ

蔵王よりおほになれだし高原も青みわたりて春ゆ
かんとす

みゆき公園歌ひ

蔵王山その全けきを大君は、明治十四年おおぎた
まいき

宝泉寺歌ひ

のと赤きつばくらめ二つ屋梁にいて足乳根の
母は死にたもうなり

斎藤茂吉記念館歌ひ

ゆうざれば大根の葉にふるぐれいたくさびしくふりに

けるかも

8/9

虹ヶ岡歌ひ

最上川の上空にしてのこれるは 未だうつくしき虹
の断片

乗船寺歌ひ

最上川逆白波の立つまでにふぶくゆうべとなり
けるかも

8/10

蔵王第二小学校歌ひ

あかねさす日のまともなる高岡に心ゆたけく子らは
学ばん

蔵王観松平歌ひ

みちのくの蔵王山なみいる雲のひねもす動力き春たつ
しも

蔵王ガーデン歌ひ

みんかどに直にに向う岡により蔵王の山を目守
りて下さる

上ノ台タツリア公園

万国の人來り見よ雲はるる蔵王の山のその全けきを
とどろける火はおさまりてみちのくの蔵王の山は
さやにそびえる

合計11

歌

きのこ汁くりつつ思ふおおほほのちぶさにすがり

あはねむりけむ

あららぎのくれないの実を食う時は父母こいしし

なのぢにして

朝あけて船より鳴れる太笛のこだまはながしな

みようう山

草づたう朝の螢よみじかかかるわれのいのち

を死なしむなゆめ

うづきいし夜のしら雲の無くなりて高野の山
に月でりわたる

さむ水にいく千という魚妻の子のひそむをみつ
心なごまむ

むかうより凍原の白なみのだぎちくる天りよう川
おりたちにけり

松風のおときくときはいにしえのひじりのごとく
われはさびしむ

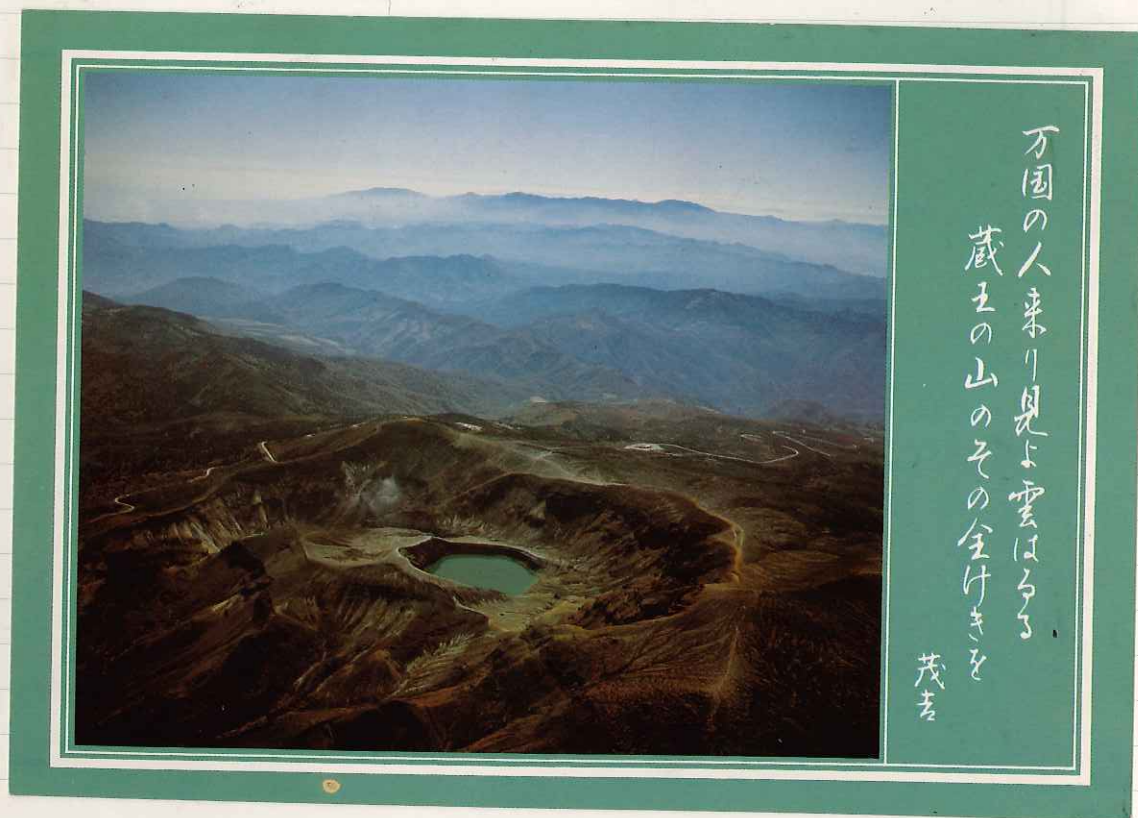
石がめの生めるたまごをくちなはが待ちわび
ながらのむとこそきけ

ガレーズヘトラックひとつ入らむと少しため
らい入りていきたり

夏されば電消さわたりて高々とあかがね色の蔵王の
山

ちんもくのわれに見よとぞ百房の黒きぶどうに雨ふ
りそそぐ

おきな草ここにのこりてにおえるをひとりほ
りつつなみだくむなり

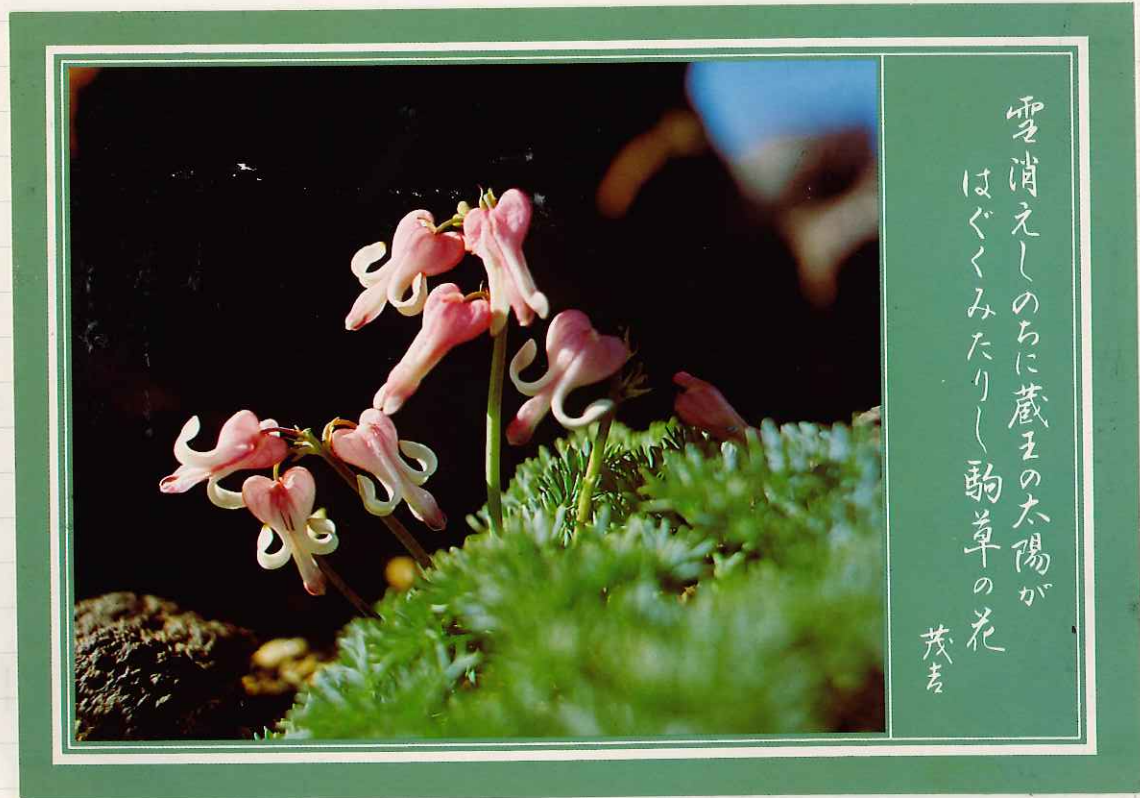


蔵王の歌

(昭和25年日本観光地百選で蔵王が一位に
えらばれたよこびをよんだ歌)

(意味) 世界の人よ来てみなさい 晴天の蔵
王はすばらしいですよ。

茂吉はずい分りよこうしているが小さいころ
から見なれている蔵王を自まんしている。
だから蔵王の美しさはたの国の美しいところ
にくらべてもけつしてひけをとらないのだ。
今ロープウェイなどできて、かたんにじゅ
ひょうを見ることが出来る。茂吉がそれを見
たらどんな歌をつくったろう。



雪消えしのちに蔵王の太陽が
はぐくみたりし駒草の花
茂吉

(昭和14年夏の作品「歌石碑行」二十二首の一首)

(意味) 雪がきえて蔵王にあたたかい
太陽がでてこまくさの花がさいた。

一面の白い世界の長い冬、その白い世界
の雪の下にある、こまくさのつぼみは春を
まっている。そして雪がきえて蔵王の太陽
に育てられたこまくさは、かわいい花に
なる。その生命力に茂吉はひきつけられ
たのかもしれない。

昭和14年夏、茂吉が歌ひに[✓]対面した時の

「歌石碑行」の中の一首

(意味)〈土方平にきて〉

高原の牧場の夜明けの清水をの
うとしたらその中に雲がしずんで見えた。
静かな歌だ。

ぼくも水たまりの中に家や電ちょうな
ど見たことがある。きっと茂吉が見た
雲はきれいな雲だったろう。またど
んな雲だったろう。



平ぐらの高牧に来てあかときの
水飲み居れば雲はしづみぬ

茂吉



陸奥の蔵王山並にみる雲の
ひねもす動き春立っらしも
茂吉

昭和17年新年五首公頁の中の一
(意味)東北の蔵王山にかかっている雲が
一日中うごき春になったようだ。

茂吉は、自ぜんを歌っている歌が多いの
できせつのはじまりやおわりに重点を
おいていたようだ。それに雲が一日
中動き春らしいなどとてもぼくはそ
ろうでできなかった。そこに茂吉の
自ぜんにたいしてのするどい観察が
表れている。



陸奥をふたわけさまに登えたまふ
蔵王の山の雲の中に立つ

茂吉

昭和14年の夏はじめて自分の歌ひを見深く
感動し、こう歌った「この山にさびしく立てるわが
歌ひよ月あかき夜をわれをおまはむ」

(意味)東北を二つに分けてそびえる
蔵王山の雪の中になっている。

とてもいさましい歌だ。蔵王のゆう大
さを歌っている。

そしてそのゆうだいな蔵王山の雲の
中になっているというほこりが表れ
ている。

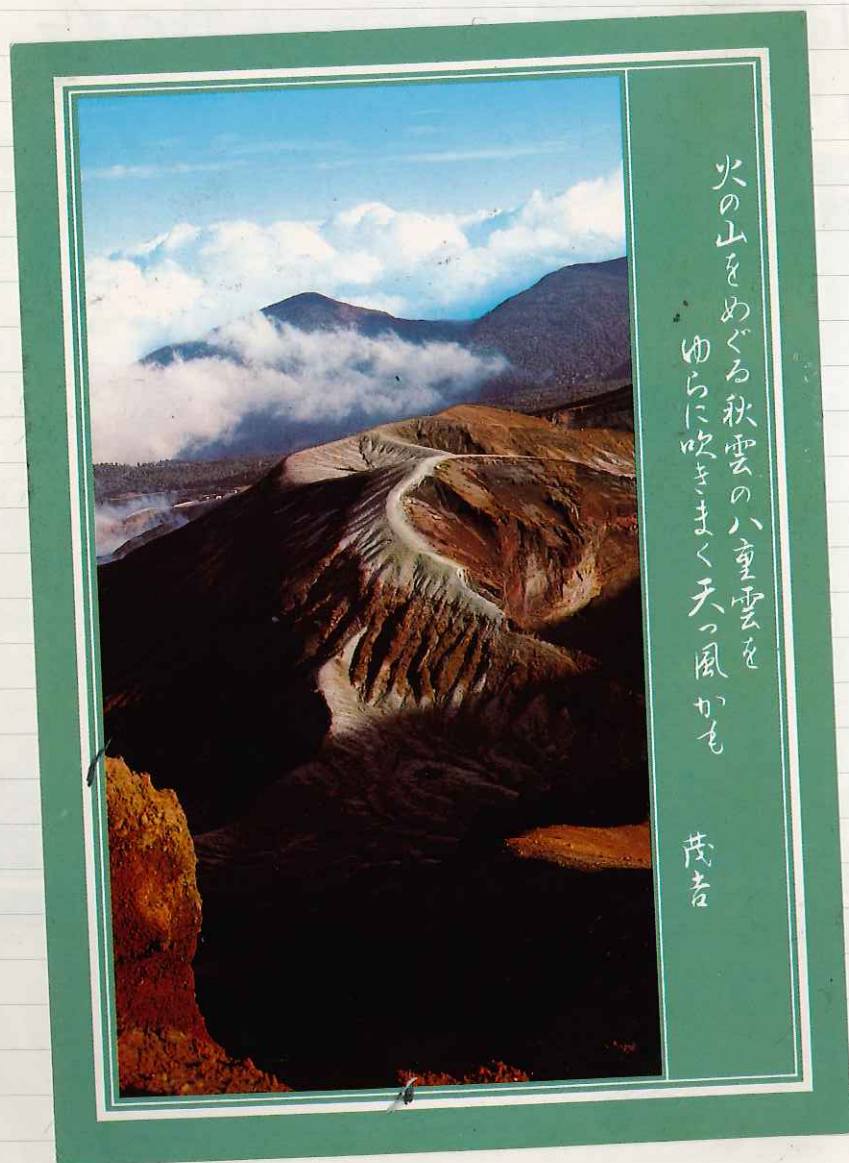


蔵王の赤はだかなる峰にありて
雁戸の山は直に青しも

茂吉

昭和14年夏くま野だけにある茂吉自身の歌
ひに対面するため蔵王にのぼった時の歌
(意味)蔵王の山のおかまのそばの
赤はだにたって雁戸山を見ればその山
は青い。

茂吉がたっている蔵王のふん火口の
土の赤さとふと見た雁戸山の青さが美
くしくコントラストとなって青さがさえて
いたのでしょう。

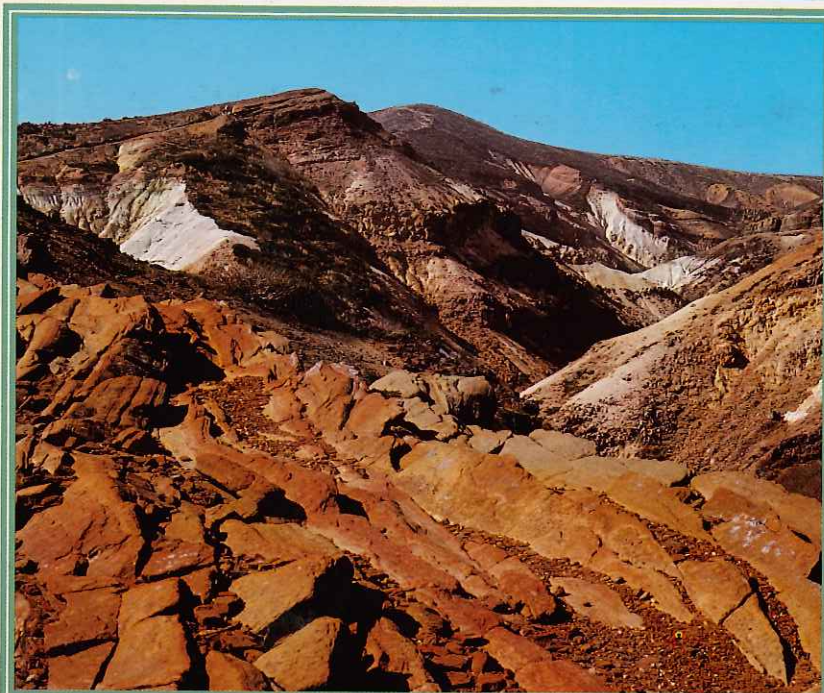


明治

明治39年作「折にふれて」の中の蔵王五首の
一首

(意味) 火山である蔵王山に秋雲がい
くえにも重って天の風がふいている。

茂吉の歌は、そのじょうきようそのままに
歌っているのが多いが、これはとても詩
てきた。ぼくは茂吉に、このような歌を作
ることもできるをはじめて知った。



雲の中の蔵王の山は今もかも
けだもの住まず石あかき山

茂老

明治39年「折にふれて」の一首

(意味) 雲の中にある蔵王の山は今でも
けだものすまない、ふんかのあとの赤はだ
の山。

赤はだの出ているふん火口近くは、生物
も植物もひっそりと静まりかえったところ
だ。



とどろける火はをさまりてみちのくの
蔵王の山はさやに聳ゆる

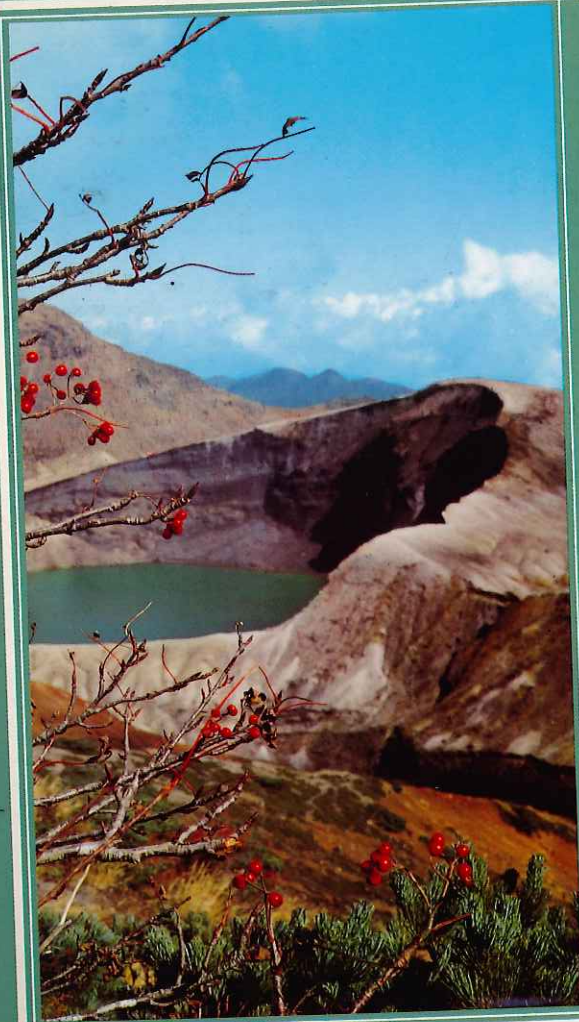
茂吉

昭和25年日本観光地百選で第一位に
えられたよろこびを読んだ二首の中の一
首

(意味) ふん火の時の大きな火と音がお
さまって蔵王の山は静かにそびえてたってい
る。

ぼくは とても この歌にかん心した。

それは 静かに そびえてたっている蔵王の山
とイメージどおりに表げんしてゐるからだ。
茂吉は すばらしい観察力をもっている。



あまつ日に目眩をすれば乳いろの
湛へかなしきみづうみの見ゆ
茂吉

おかまを歌った八首が歌集「赤光」に、おさめられている。

(意味)太陽をさけて日かげから見た湖の色がなにか悲しいように見えた。

おかまは、光のあたり方によって色かわる。こい緑は明るけれど茂吉の歌った白っぽい緑はほくもさびしい色だと思う。

大正2年母と死別した茂吉は、傷心をだいて山に登り、「死にたもう母」一連五十九首を作る。「赤光」におさめられているこれらの歌の最後の部分の歌である。

(意味) 蔵王の山にウロコ雲がかかやいた夕方がくればそのそばにいった。

夏の雲も美しいが、秋のウロコ雲もちがう美しいだ。その美しさに茂吉はひきよらせたのかもしれない。



蔵王山に斑ら雪かもかやくと
夕方がくればそばゆきにけり
茂吉



昭和17年上山温泉の宿で作った歌

(意味)雪がふった山はだに夕日かきさ
すとむらさきに見える。

この歌は茂吉の観察力がよくわかる。

そんな山はだを茂吉は歩いていたのか
もしれない。

田名 歴

年代	年齢	主な歴
明治15	1	5月14日山形県上山市農宇谷伝右エ門の3男として生れる。
29	15	上山じんじょう高等小学校卒業、9月上京斎藤紀一にきくうし、東京府開成中学入学。
45	31	医科大学助手にめいぜられる。
大正3	33	斎藤紀一、二女光軍子と結婚した。
6	36	長崎医学専門学校教授ににんぜられた。
10	40	文部省左外研究員を命ぜられ大正13年まで一ストリーヌビドイツで医学の研究した。
13	43	医学博士の学位をとる。
昭和2	46	青山の病院のよくをつぐ。
12		てい国芸じゅうつ会員。
15		「柿本人麿」の業せきにたいして、てい国学士院しょうをうける
26	70	文化くんしょうじゅうよ
28	72	2月15日東京都にて病没

4 わかったこと

ほくは、この研究で次のようなことがわかりました。

(1) 歌ひについて

。茂吉の歌ひは、県内に36ヶ所、そのうち2ヶ所が茂吉が死んでからたてられている。それは、茂吉は、初めてひらがなを使ったわかりやすい歌を書いたので、ばん年になってからみとめられた。それに昭和二十年代は、物資が少なく、歌ひなど立てられなかった。だから昭和三十年ごろからは、たくさん立てられるようになったのだった。

。歌ひがたてられているところは、歌にかんけいある土地で、自然がきれい、周りがせい

びされている。

(2) おいたちについて

- 小さいころは、ガキ大しょうだが頭はよかった。
- 家は、金井村で中位より少しいい生活をしていた。
- 十五さいになってから、しんせきの斎藤紀一のいる東京へ医者になるため上京した。

(3) 歌について

- 寺、生家、学校などとてもおそまつ、しかし小さいころから自然に親しんだ、それに、茂吉がすんだところなどは、自然がとても美しいだから自然についての歌を作ったんだと思った。
- 祖父は、和歌を作っていた。だから小さい時から歌に親しんできた。
- 本業は精神科の医者であったがしゅみに歌を作っていた。しかし大石田にそかいした昭和20年から歌にせんねんする。

5 研究の反省

1. 歌ひにはいけいなどのせつめいをしてよかった、しかし蔵王の山ちょうの歌ひを見れなかったのでざんねんだ。
2. 時間によゆがなかったので茂吉記念館などくわしく書けなかった。
3. しゃしんをとったので思い出して歌ひなどのせつめいをつけたしできた。
4. メモに書いておいて家でノートに書くとよかった。
5. 大石田上山、蔵王など歌ひをたずねて思いがけない美しい自然を見ることができた。

6 参考資料と協力してくれた人

1 参考資料

茂吉の周辺 斎藤茂太

斎藤茂吉伝 柴生田 稔

斎藤茂吉 木林勝夫

2 協力してくれた人

お父さん

村田さん

大久保先生

お母さん